

---

# キスの味

弥月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キスの味

### 【Nコード】

N6779T

### 【作者名】

弥月

### 【あらすじ】

遅めの昼食を食べていたら、突然ジェチが僕に好きな人いるのか  
つてきいてきて……。

中華／一番でジェチ マオ フェイです。

マオが女体化します。気をつけてください。

昼のピークが過ぎて一息ついた頃。

厨房の片隅でジユチとマオは遅めのお昼を食べていた。

他愛ない話の中で盛り上がっていたのまではよかったが、

「マオはん好きな人って居てるの？」

不意に出された話題のせいで喉かな休憩が一変して思わず、飲んで  
いたお茶を吹き出しそうになった。

「ゴツホゴホ……じっジユチ何言って!!」

「やだなマオはん。好いてる人くらいおるやろ？」

ニヤニヤした笑みで肘でつついてくるジユチが、なんとなく怪しく  
て反射的につい身構えしまう。

「別に僕は特別な好きな人はまだいないよ!!」

「まだってまたまた」

ジユチのニヤニヤとした笑みは消えず。

寧ろ獲物を見つけたかのように視線が刺さって痛い。

（いるけど言えないもん。フエイさんだなんて……）

バレたくない。バレたら大変なことになる。

自分が女だと言うことも話さなきゃいけないだ。

（そんなの無理！！）

マオは冷や汗を足らしながら必死に冷静を装ったが、自分でも情けない声で、「本当だって！！」否定をしたものの……。

「マオはん。嘘はいけまへんわ。ほら可愛いお顔が真っ赤」

ジユチが言うなりグイッと距離を縮めて、ほらつとばかりにマオの頬をジユチの手がむにと挟んだ。

頬にひんやりと冷たさを感じるがそれどころではない。

「それはジユチが変な事言うから！！」

「別に変なこと言ってへんよ。マオはんにいるかいけないか気になっただけですやん」

目をぱちくりさせてサラツと言うジユチにほとほと困り、

「それはそうかもしれないけど……」

「マオはんって意外に奥手なん？」

「は！？」

どうしたらそうとらえられるんだと心底驚きと苛立ちが芽生え。ついでにジユチの手を払いのけて、

「僕が奥手だろうとなかろうが、好きな人が居ようと居なかつたがジユチには関係ないだろ」

「それはどこい大有りや」

さっきまでの笑顔が消えて真剣な目付きでマオを見る。

「それはどういうこと?」

僕も応えて真剣に向き合った。がジュチは急に口元がにかつと上がって

「さあ〜どういうことでしょるな」

「ジュチ!」

急に真剣に言ったり、また茶化されたりで、まるでジュチに持て遊ばれているかのような態度にいい加減腹がたってきた。

「もういいよ。この話はやめよ」

「マオはんは気にならんのか?」

「……気にならないって言ったら嘘になるけど。このままじゃ埒が空かないじゃないか」

マオがぼそつと言うとジュチはマオの片手を引っ張り抱き締めた。そして素早くマオの顔を無理やり上へ向かせる。

ジュチの顔が鼻に付きそうなくらいになるまで間近に迫りニヤリと笑う。

「こんなことされてもまだわからへんの?」

「……!! わっわかる訳がないだろ!! いい加減離れるよ!!」

「いけずやな。マオはん考えてみいひんの？」

「考えるたって……」

マオは今更考えってみてもさっぱり分からなすぎてへの字に眉を潜めた。

するとジユチは面白がっているのかクスツと笑い。マオは耐えていた堪忍袋がこの笑顔でプチツとキレた。

マオはキリツと睨んで言い返そうとしたときジユチがマオの唇を親指でなぞり、

「例えばやけどなこんなことされたらどない思っ？」

「どないって……」

マオが動揺して声が震えた。

ジユチはお構い無しにマオの耳にリップ音を落とす。

「なっ何やってるんだジユチ!!!!」

「えっキス。まあ耳にやけどな」

「それはわかって……うんっん!!!!」

やっぱり訳が分からないと怒鳴ろうとしたときに今度は唇にされた。

「じっジユチ!!!!」

マオはみるみるうちに頬も耳も真っ赤に染め上がったり、まさに茹でダコみたいだ。

ジュチは満足したのかにやりと上げる口元が憎たらしい。

「なんでキスする必要が有るんだよ！！僕をからかってるだろ！！」

「……」

「ジュチ！！」

怒鳴り声を上げてみればジュチは満面の笑みで、

「我慢できへんよ。そないな顔をされたら」

「我慢つてなんだよ！！僕は男だぞ！！」

ムスツした顔で睨み付けてやれば少しは距離を置いてくれると思つたのに全然引いてくれないし、まだ顔が近くにあつて落ち着かない。

「それはどうでもいいやろ」

「良くない！！そつそつというのは大事な……すっ好きな人にやるベキだろ！！」

「……おまえや」

ぶつきらぼくに答えるジュチ。たがその言葉の意味を理解できずマオはただただ目を見開いて驚き固まった。

それでもジュチはマオを見つめて言葉を待った。

それでもマオが出せた言葉はとても小さな声。

「嘘だ」

「嘘じゃない」

「だって、そんなことあるわけない」

否定したかった。

だってジユチはメイリンのことが好きって前に言ってたしそれに自分分は。

自分には大事な人がすでにいる。

ジユチの気持ちには応えられない。

マオは重くのし掛かる気持ちに目を伏せた。がジユチの真剣な声が耳に通る。

「好きや」

「だって僕は男で」

「それでも好きや」

「……」

ジユチの目が本気だ。わかる。

マオにもわかるくらい必死ってこと。

それはちゃんと伝えていない相手にとって大変失礼なことだと悟った。

マオはきりつとジユチに向かい合って、

「ジユチ。ごめん。本気の事話すよ」



「ほんまの事？」

「うん。僕にとってもう大切な人……大好きな人要るんだ」

マオは目をそらさずジュチに伝えた。

だって本当の事だから誤魔化して逃げるのは本当に失礼だからと。

「知ってた」

「へっ？」

「フエイやる。もうバレバレや」

たしかに美形やもんなあとジュチは苦笑しながらマオにいったがそんなことマオは聞こえてなかった。

だってこんな発端が起こったのは明らかにジュチが仕掛けた『誰が好き？』などというふざけた質問からだ。

そう思うと収まっていた怒りがふつふつと燃え上がる。

「ジュチのバカ！！つつか離せよ！！」

「いやや。好いてる女の子の抱き心地は気持ちええやもん」

「……」

ジュチは言つなりぎゅっとマオを抱き締める。  
それに対してマオは暴れているが。

「どっどうして知ってるんだよ！！」

「そら、好いてる子を見とったら性別偽ってることくらいわかるちやうか？」

「うう」

「それに邪魔もんが居ても諦めるわいじゃあらへんし」

「へっ？」

マオは間抜けな声を上げてしまった。がその瞬間またキスを落とされるとは夢にも思わなかった。  
軽く鳴るリップ音と舐められた唇にマオはひきつり声を荒げ。

「ジュチ！ちゃんうんうっ……！！！！！！」

その不意について今度は舌を口内まで侵入させてきた。

歯並びにそってなぞったり舌を絡ませたりしてくる。

不愉快で仕方ない。

いくら舌から逃げても絡めてくる。

それに聞き慣れないピチャッやクチュなどの音が厭らしく響いて嫌だった。

「……うんっんう……」

とにかく逃げようとしたが、逃げようにも後頭部を押さえられて身動きできない。

息が出来ず鼻から通るへんな声も聞こえる。

マオは訳が分からずでも目から滲むものが流れていた。

（苦しい。苦しいよ）

息も限界でこんなキスは知らないし、目の前にいる人が怖かった。

やっと解放されるとマオは貪るように空気を吸っていた。

肺に酸素が入れ荒い呼吸を調えるように。何度も繰り返す。

大分落ち着いてくるとマオはジュチに支えられていることに気付いた。

腰がまったく立たないのだ。

力が抜けてしまつて今ジュチの支えがないと立てないほど。

さらにまずいと警告音が頭の中でも鳴り響く。

マオは血の気が引いた。がジュチは見逃す筈はなく。

「やっぱりマオはんは色っぽいわ」

「なにいつて……」

「潤んだ瞳も苦しそうな表情もめっちゃそる。特に唇なんかえろいで」

意地悪そうな笑みと共に囁かれた。

ジュチはマオの滴った口元を拭いと、また顔を近づけてきた。

また来るのかとマオは肩を震わせた。

ジュチに反抗したいのに力入らず思うように動けない体が憎い。

（フェイさんたすけてえ）

心から強く願った。

もうこれ以上ジュチに踏み入れほしくない。

フェイを裏切りたくない。

マオは溢れる涙で頬に一本の道を作る。

『ちよつと待ってもらおうか。ジユチ！！！！』

唇が触れる直前にどこから声が聞こえた。

ジユチは怪訝した表情に変わり声をした方を向く。

直ぐ様目を見張った感じで驚いていた。

マオも向くと涙で滲んでよく見えないが、綺麗な深い茶色の長い髪と黒い服装。

そして良く知る声。

マオは自然と笑顔になる。

嬉しくて嬉しくて声を出してみたが思ったように声が出ない。

からうじて出たのは「ふえいさん」と言うか細い声の想いの人の名前だけだった。

フェイはマオの異変に気付いて更にきつくジユチを睨む。

そして氷つくような低い声で相手を噛むように言い放つ。

「……マオから手を離せ」

「はぁー。 shouldn't 彼氏出てきたらかなへんもん」

ジユチは笑ってマオを引き離すと椅子に座らせた。

マオを名残惜しそうに見つめてから、フェイの前を通りすぎたように見せかけてフェイに詰めより。

「フェイの旦那。マオはんを見張つとらんとあきまへんで」

「余計なお世話だ」

「そうか。でもわいまだ諦めたわけちゃうからよろしゅうな」

ずっとジユチはフェイから離れヘラツと笑って消えて行った。

\*\*\*\*\*

いけすかない相手を視界に写らなくなるまで睨んだ。  
居なくなつたの確認してからマオの隣に立ちやわらかい笑みでマオの手を握る。

「マオ大丈夫か？」

「……うつうん」

マオはか細い声と頷きで必死にフェイの問いに答えた。  
それがとても健気で愛おしい。

フェイは目を細目で微笑んだ。マオもつられて笑う。  
いつものような笑顔だ。

ただ目は赤くなって痛々しく、彼女が如何に辛かったかひしひしと  
伝わる。

それが悲しかった。握る手の力がこもる。

抱き締めたい気持ちを押さえてマオの頬を包むように手を添え、涙  
の後を優しく拭う。

「マオ。すまん……俺が早く来ているいれば」

フェイは唇を噛んで己を恨めしい。  
だがマオは首を横に振ってからフェイに首に抱きついた。

「……マオ」

まるで大丈夫だよとばかりにぎゅっと強く抱きつかれ、今顔は見えないがきつと安心しきった顔でいるに違いないとフェイは感じ取った。

だがいつまでもここにいるのは良くない。

ここはあくまでも厨房。

いつ誰が来ても可笑しくないのだ。

フェイは一樣落ち着いたマオを別の場所に運んだ方がよいと判断しやさしく囁く。

「マオちよつと移動するぞ」

言うなり直ぐ様行動を起こした。

驚いているマオにしっかり掴まってろよと言った瞬間にマオの膝を抱えるように抱き上げた。

いわゆるお姫様抱っこだ。

「だっだいじょうぶだよ」

「まだダメだ。それにここは離れた方がいい」

「でも……」

「腰が抜けて立てないだろ」

「……たてるから」

「ダメだ。呂律さえまだ治ってないのに」

フェイはまるで子供をしかるようにマオにめつと言いつつと軽々運ぶ。

マオはまだ拗ねているのかムスツとしていたが暫くすると首に手を回して体を預けてくれた。

見た目はわりとしっかりしているように見てたのだが実際に抱き上げるとマオは軽い。

服でカモフラージュしているせいだろう（メイリンの力作でもある）がこれだけ軽いと不安になるもんだ。

小さなため息をつきつつフェイは自室に向かった。

借りていた宿舎にはマオを人に見せることなくたどり着くことができた。

ほっと胸を撫で下ろしてマオをイスに座らせる。

部屋はクローゼットとベッドが部屋の隅にあり、その近くにはテーブルとイス、お茶セットなどが置いてあった。

落ち着かせるためにもいだろうとお茶を出そうと思い、近くにあったお茶セットを持ったとたん背中違和感を感じた。

振り向くとマオが上着の裾を掴んでいたがフェイと目が合うとすぐ離して、ぱっと離しておどおどしている。

フェイは微笑んで、

「どうした？」

「いやあ……あの……なんでもない」

「大丈夫。ちょっと部屋を出るがすぐ戻ってくるから」

一人にされるのが不安だったのだろう。

安心できるように答えたらマオはうんと頷いて微笑んでくれた。  
フェイは堪らなくなつてマオの頭を軽く撫でてから部屋出た。

多少お湯を沸かすのに手間取つたが割合早く帰つてこれた。  
ドアを開けるなり花のように笑うマオが迎えてくれた。

「お帰り」

「ああ。マオもう大丈夫なのか？」

「うん。大丈夫」

えへへと笑うマオにフェイも思わず顔が綻ぶ。

暫く二人はゆっくりとお茶を飲んでいた。窓を見るともう日が沈みかけていてオレンジ色の綺麗な光が窓から差し込む。

時間も経つたお陰かマオ大分いつものマオに戻っていた。いや、たぶん無理をしているのだろうけれど。

少しでも不安が取り除けられればとフェイは思う。

「もう夕方だな」

「あつ仕込み!!」

窓を見ながらフェイが呟いた言葉にマオ過剰に反応した。

立ち上がって駆け出しそうになったところをフェイが引き留める。

「食堂の事なら大丈夫だ」



「えっ」

「さっきついでに食堂の亭主に話を通しておいたから休んでおけ」

「えっでも話って……」

「お前が具合が悪くなったと伝えた。店のことなら心配ないメイリンもいるし」

まだ納得いかなそうだがマオは席に戻った。フェイも向かいのイスに座る。

「帰りはメイリンたちが迎えに来る」

「フェイさん。もう大丈夫だよ。歩けるし自分の部屋く「ダメだ」」

眉間に皺を寄せながら一刀両断にマオの意見を否定した。

「1人で帰っているときにまた襲われたらどうする」

「でっでも見た目男だし」

「……ダメだ。いつでも俺が助けに行けるわけ無いんだから」

マオはしゅんっとなつてこくりと頷いた。

フェイは好しと笑った。

\*\*\*\*\*

本当は1人で部屋に戻るのは怖かった。

まさか自分を女だと見破る人がフェイ以外なも現れるとは思わなかったし、

そしてあんなことをされるとも夢には思わなかった。

今でも思い出すだけで身震いする。

あの感覚、味、苦しさどれも嫌悪感でしかない。

（僕はこれから好きな人……。フェイさんとできるんだろうか）

考えただけで胸の奥がぎゅっとつかまれように痛い。

甘えたいのに甘えられなかった今を考えると、

どうしていいのかとマオは泣きそうな顔を必死で隠していた。

\*\*\*\*\*

どうもマオがおかしいとフェイは気が付いた。

マオが落ちついたように見えたのでベッドに座り壁に背を着けて読みかけの本を読んでいた。

だが時おりマオの肩が震え何かに耐えるようにぎゅっと両腕を掴んでいる。

フェイは本を閉じてそっとマオに近づき、目を見張った。

「……マオ」

「あっフェイさん！！これには、えっと……ゴミが入って」

えへへと笑うマオには目尻に涙が浮かんでいた。  
そして溢れて抑えきれなくなった涙の線もはつきりとフェイの目に  
うつる。

「マオ」

フェイは思わずマオを強く抱き締め離さなかった。

「フェイさん苦しいよ」

マオは言いながらも嬉しいそうに笑い。

マオもフェイの背中に手を回し、フェイの胸に顔を埋めるように体を預ける。

「ああ。すまない」

フェイは笑ってマオの頬の涙を拭おうと触れた瞬間。

マオがびつくと大きく震えた。だがマオは顔に出さず微笑みを浮かべているがフェイは見逃さなかった。

確かに触れた瞬間に大きく動揺していたこと。

「怖いかな？」

「……少し」

小さな声で呟いた声が聞こえた。

そして回された腕がきゅっと締めまり、

「……でも嫌ってわけじゃなくて安心もする。フェイさんのこと大好きだから」

「マオ」

「でも怖いんだ」

そう言うときまたマオの肩が震えてきて涙が頬を伝っていく。  
フェイは急かさずマオの言葉を待った。

「きつキスなんてっ初めてで……。なのにつぁんなに」

マオの目が陰る。

もう震えが収まらなく嗚咽も堪えているようだ。  
フェイはそんなマオが居た堪れなくて、

「無理して話そうとするな」

「でっでも話したいんだ。きいてほしい」

たどたどしい声でお願いするマオにフェイは頷くしかなく了承した。  
少しでも安心できるようにマオの背中を擦りながら。

「あんなに怖いものだとおもわなかった。

もっ……。

もっ……と幸せなものかとおもってた。

もう怖くて、こわくて。

どんなに押しても逃げれなくてくるしくて。

助けてほしくて、

なんどもフェイさんのことをさげんで……。」

マオはもう耐えられなくなった嗚咽がせきをきったかのように溢れ、そこからはもう止めどなく涙が止まらなかった。

フェイはすっかりマオを抱きしめて大丈夫だからと何度も何度も囁いた。

「ごめんなさい」

ぼつりとそんな声が聞こえた。

「なんでそんなこと言っただ」

「ぼつぼく自分自身を守れなくて。ふえいさんにも迷惑かけて」

そういうとまたごめんなさいと言葉が聞こえる。

フェイはそんなマオを見てるのが我慢できなくて額にちゅつと唇を落とす。

次は目尻、頬と軽くリップ音をたて、それは何度も往復して涙を拭いた。

「フェイさん？」

マオは驚いて目を見開いている。

そんなマオも可愛くてついほっぺにまたキスを落としてしまった。

「俺はマオの笑顔が好きだ」

「えっ」

「本当はジェチに嫉妬したし、俺だってマオとキスだってしたい」

マオは聞いたとたんに顔から火が出るかのように熱くなり動揺した。そんな率直に言われるとは思ってなくていつもこんなにはつきりと言われたのは初めて頭がついていたない。

「マオを感じたい。大好きだから」

紡<sup>つむ</sup>がれた言葉はマオの心の枷をといってくれた気がした。思わず顔が綻んだ。

「僕も大好き」

えへへと笑うマオが、可愛くて愛おしくて。

「マオ。ちゃんとしたキスしてもいいか」

「うん」

照れて頷くマオにフェイは深い口付けをするのでした。

(後書き)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6779t/>

---

キスの味

2011年6月13日08時00分発行